春色江戸紫初編 上

国立国語研究所
30201
図書館

中本

国立国語研究所
1001952207

題后ドる
現。土之のしを敬へ

養閑山房之印

横浦江戸紫春

人の縁を言ふ事向き。自己が長と税となるの紙

ゆゑがしき事言葉無ゑ那ごの難。今や

江戸住ふと喫ふる事本ハ此つの故御人ぞ

若木ふ也。笑ふ禮黒白なるもぞとのへぞ也。

趣向凡なし。淡しく。能男女乃情態とさぐ

現。志のも故へ此道立てり。志のハ何ぞ

此る小郭に。歌舞此菩薩と崇らせし金
堂も。たゞ有驛に初見世と唱る極渉り変
化しきりて。弟をして景ふ示す極の海藻を出
じへ。猶言さを省き足らずるを補ひてよと。出掛が
求と辞ゝも申ばそ斯く初事々のきれぜ是人
の短を省自己が淺を添ふ事ぞ。ぞと祇しに術ふ事ぞ。

山ゝ亭ゝ人初

柳亭左楽

假名垣魯文

惣次序

松坂屋
善兵衛が二男
善次郎

東都
松坂屋
惣次郎
言号於久美

きさきだけ
北澤家の妾
おひめ
法名智清
ちせい

春色江戸紫初編上之巻

江戸　朧月亭有人　補綴

第一回

今さらに。捨とも何かせしからむ。もしより世にもこのる身なら私だトハ茶の右大臣の室が祿哥として。續千載集述懐の歌に見えたりとぞ。更かならぬ茲にまゝ。久待町に松坂屋善兵衛とみん唯有して。木綿猪布の新ひをば法西へ廣く取引なさ。大商人なりけるが妻のお貞ハ此程より

なかにも殊に女ハ一端人の家へ嫁て再び敷居ハまたぐまじきもの。
親や夫ハ折節をもつて心に絶てさへゐれば何もむげ
にハ理屈なけれど、惣じて女ハ心やさしく情深きを善とする
と。女大学にもある通り。京下女端女にも仮初にも親夫
小説なんどの書にハいふなるべからざることをも、芸で識ツく
きかせると。下人ハ尤のきゞなりとも、其史を伝て人へも饒舌
親夫の恥辱をば、世間へしらせる根となりの、夫も是も
平日内端なせしより根本も出るものゆへ、つゝしみなるべし

ゆうと。采しむ甲斐あく此度の病気。志りしお茶と惠須
帝も。何様ゆゞ非食ゆうす。是でん縁りハあい長ぐも。今
云ツタ事を忘れてハあらあいヨ何様いとして忘れく
よいものでどぎいませうぞ根して恵母様。空とお脊中
でも。さきとりませうろ イエ文ハ及バあいうら何ちらへ縁
ゆて惠須帝を呼とでおこれハイ若且那様ハ父上様が
居てとゐ入ましたらぞ。降今お呼びやませうト云いつ立
て。行初へ待る程あく。惠須帝菓子の折を持あがり

一ハイ慈母根室町貼ゟ弟がゝ御見拝がゝ来りまして一左様
ゝへあんごゝ。志ゝあいが看病の所へ喰させくおくれ一十二
是ハ十朝店の四月堂で製まれ鬼の雪と申様ゝ
御菓子でございまれゝ。あんあゝ。壁百あがれナ一十二不し
くもあいゝ止ませう一唯冷お香あゝ後程でも。喰
らわるものハ喰らあいト御気力が附ませぬ。丈も左根
あり。お菓も精出して百看病御金波拝ませ。あん
あゝ宮一夜自己が養ませうゝ一ハア菓も呑ます

参ハあんまり服しすぎるといかゞ煎じさせるうち其儘に
して置大に様して置家に空湿て置ことこそ肝なれ
密と側へ置家より一へ小瓶にて入かへて空に仕舞置物にて匂ひ
すこしの「夜分でもあいかゞ空に置家す湿て置こと其間に
テ「夜分で御座りますこと夜陰を膝へ置て寝へつ
く「夜分でもあいかゞ音併の病気とても近所ハ腰元ちらがは
どのれ様其小鉢でお家には出して置いたらの事なる
夢お家ハ音併どものの手でも寝ぐ近所の親く伊西ほ方

の所武家ともや左様ごとく。異乱のありに同じ家中の娘と
不義をして終に。其あらぬことありし也。欠落して
当地へ下り。直此裏に店借りして。浪人のこゝろきな
く。同じの烟りも上兼るを居る情度が。さの毒がつて、何
角力にあつて進ぜこうち毋所ハ。お茶を尅おとし後の
あやこの強くして。猛なく黄泉の客となり又こもべ
て。此難病これも猛なく此世を去りて生死隙に。お茶の
るが黄泉の障りで。死きれぬと咲も夜な譚。幸此方

恵次郎

音俳が死ンだ後とてもおくさまぷながる縁もあれば。
ん縁でハおやりぶらんが変して損を掛させまいうら。
今しは暫ゝ後れ助力はなッて下されトいふも苦し
き。息づかひ恵須郎ハ脊中をなで「夫ハ与作迄もなく
此方と室町ハ。素より一ッ家のるのなれば助力ハ。成めし
成れもするハ。コリヤいたゞなりますハ亦此家就で二十や
二千。室町へ送つてとて何の儀ゝ。なるぞハなしかしも
何乱きひ捨だしますな。亦おくゝか夏日。縁なのれハけそ

史歸と為りて。百年の昔朱も共に土とるものを生死ハ知
らぬ。私に。見ん捨る所理がござりませう。史ハ兎も角も。
病ひハきうらでるとゞ。中せだ本戯にも死ぬなんだと。ち仰
ぬが宜で産りますほト以来いくど。仏史ハ本係終も程近き
と案ずるものから。何られと世に形毎しく。云さとし看
病。おとゝり病らざりしが終に。生翌晩分。泉下の家と
なりけれだおとゝハ。更なり惠次郎もなけきをかつて
抹とし。洞を池と流へしが。行て是ぞきゝなら私が。

辺の道りも罷く数七日くの退雅もいと怠りなく勤なるとぞ

第二回

再説惠次郎が弟。善次郎といふハ。這も右貞が雅の子なれば。善三情いまだ四十歳の頃。酒興よ繁しで侍女のお牧と仮の深外も。一根二夜と度重り終不唯ならぬことなりけれども。善三情支の由縁を。善の右衛門に譚しに。素より貞婦のるすかしなれば。此脈を乱気も有く。這ハ彫ふてもなきを幸なりとぞ。ひてさらに安義

祈りけるに。尚る十月にやまとしたとせしハ男子なれバ。
お貞ぶ喜び大かたなるに。我子とあしてぴつくしたお牧ハ
妹のごとく。ぴくりけれバ若き情も其赤んに風。お牧ハ
豈の金子をなへ。上性風桐生の迎へ娘しけるが。
お牧ハ丈に。別れ子としてもなれバ生家に。居づらく以前
の親なるをもて。久藤町へ使りて来しが。彼ハ若き情
も其に別れ国麻しき比なりけれ。諸に焼ぶつ様
にハ。史が府やさとく。ぴくに丈なりとなりけるが。幸よりお牧ハ

ん出れる者なれば我子の名次郎を家督なし故組
を由彼と販食せ。惠次郎をば退生さんと若次郎も
貝塚を進めるが。彼も此性母に似て縁に好色の
癖なれば。おくこの容貌程厳なる。惡慕して何率ひん
を退生し。おくこを妻に娶さだやと。打節父の若を
にも言ふを促しなるが。惠次郎は書子。若次郎は実子の
事なるにまして女牧が色香に迷ひ。円弥を任せる若
れば。若衆情も貝亮なる事を。惠次郎は疾くも察し。我

ろら喰んで遣ッて。お呉ンなさいヨ「一件ろへ」「アヽ」「旦那た様
して遣ッて。お呉ンなさいヨ。後生ぶなりますから」「喰ぐれへナ
夏ハ。何様でもいゝが此方ハ惚るの。晴るのとうふ丁正実
ふゆゆ養られめへぢやアねへろ」「あんまり左様でもいうます
まい」「左様ハ難が。嬉うないですゝ」「モシ旦那好男子ハ。
何かなる。ふ堀ゲスねトキニ武丁目のもアノ倍ぢやアあやせん
ぜ実ハ言葉変でも。往ッて上下ねへト私がどうぎこ服
まれる人ハ旅やさとうろ」「ヘア鮑中さん引込て。お左旅ヨ

モシ旦那。小郭ハあつち此方ハ。こッちですハ私正実に吾儕
ヤア彩まれて困きるンですヨ情合にあるならないハ。鬼も
角も左出格を送りあがら為媛。唯ンで差ッてお呉ト敬ヨ
左
一生方の法門談あらば鬼も角も。自己ヤア何格でも宜う
でせくヤス。併史雅必ふお人を生徒にまとるのハ。是様の
大通あらばサ。宮本無三四のせり姫に。猛きむうりが武士
あらば。情の為が弱きにもならば。ドウにだやアでせんやせん
う。お幸さんの敵も立ちく唯んでこらうじろ子一左格お住

上成ヨ此アタ面一の長で一度を綴ましたのサ。左招さるとす。
貴男トお幸様ハ腰合でもなる招ハヲツウ勘探て吾御
に。問綻を掛ますサ史から吾御も態と。がらい面に旦那
がお幸さんに臆てる招に譚ハと恵帝にあんて。眼しがつ
て仕舞ゆやア泣出しさうに如ッて。来ましたから吾御も
来の毒にあつたし。史りやア呼ぶ旦那もお前にやア余ッ程
話なりダとらゆと史までの怖敵に引替て完成し笑
ひましたハ「そりやア一昨日の晩ぢやア面しう」「能知ッて。お主

ダ子一ゑく理で昵日湊やで一寝を致し時。なんごろ附ぶ
ちりいのサ。生根なるゆゑ豈もあらば。コリヤア只那を五指
ツて呉ろとりふのたと。さつぱり場が所ないうち。生服立で
ツンけんするのうとツゝが。左根りふ子細ゑ。お家て人を。
半銭ゆも程がなるア私一丈が一中毎恵半銭ゞ此方ぢやア
価蔵のきでも。先ぢやア志安ぐうち私一お楽さんごッて
まんざる世蔵ナ人ぢやアないが実に意は世者が矣渇
お幸さんや。こ思さんがあきりに。志教な根ゞが能人

「お捨ッて言ひ訳ヨ。左楽様あんざアノざりやすも寛にて「いろ
迄御懸まわるゝあぶりいアくるゝ文ちやアお振まゝやせう。
あんざる深く云ふ事あるまゝぐざりいしても左楽様と申すも向山閑
有る暇らして舟ハ兎も角も振舞ニ迄下げやせう
「左宝ニ出入やす文ちやア推察しいのを一寸噺して。
参上やせう　叙「今日の見物ハ金殺割がえるいう長
語らと思はるかりやア読用か自慢れ　無「純なる様ハ
見来。とうまどろ　叙「左様して是非お舟ハ　無「大様構く

附くるに米糧とうつゝのを喰ふとして宮すてし
喰物を入まして姫鮮だく。ぢぢくく穀ゆのぞ丈ハ左様
と何處へ左様ゆくやるのと「矣ッ強新上穀屋が。
冥ぐらぐらいまたア孫一丈ぢや。鯉中子太義なから。
使者ハ粮まうヲツト兼和と出行て彼新上穀屋
へ。いくりける

作者曰
柳男女の情態ゆゑしきものハあるべからず
今此本ハ柳川巻ハ一二をのぶそふ全盡ふて

30201

彼おみよお今なんどさ。ちさくおとらぬ老にして
負羅まゝ他こゝ矣なれど室を惜まずこれを
いどむ老日こ幾人といふをぢゝほどお朱ハ此報
を見向もせず形お幸お思の二人をこの恵須郎
をぢゝふ仏説こゝふ義世の宿業か予が友尼朱
子の歌に

色男よ何がなるとも志ゝ梅のすいがなるとも志るやぢゝ

春色江戸紫初編上之巻終

9
66